
短篇作品集『海底の砂』

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短篇作品集『海底の砂』

【Nコード】

N1128P

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

短篇小説集。

ジャンルはファンタジーから現代ものから色々ごちゃ混ぜです。その時書きたいと思ったものを書きなぐってます。

基本的に一話完結ですが、たまーに別の話と繋がったり。不定期更新。

慟哭した日

かつて、この世界には一人の魔女がいたんだ。

魔女は鬱蒼な森に住まい、人でない魔物の類と親交を深めていた。害はない。ただ、国の一角に、彼女の住む森があるだけ。

しかし――。沈黙に伏していた彼女は、いきなり王国へ牙を剥いたのだ。

森の見回りをしていた兵士の死体が王城へ届けられたのを封切りに、国に対する魔女の攻撃が始まった。

当然の如く、王立軍の一部隊が森へ向かった。結果、部隊は全滅。緊張が走った。

あたしは当時、そこそこの評判の傭兵をやっていたんだけど、魔女に関わるつもりは毛頭なかった。

誰だって、危ない橋を渡るのはごめんだろう。死ぬ確率が非常に高い依頼なんて受けたくない。

なのに。

あたしの腕っ節の強さを聞いた国王お抱えの老いばれ魔法使いが、半ば強引にあたしを『魔女討伐部隊』へ引っぱりこんだ。

しかも、部隊長という肩書きのおまけつき。

あたしは魔法使いを怨んだね。国王の感激した顔、いまだ忘れやしない。

こうして編成された寄せ集めの部隊は、酷くやる気ない者達ばかりで、最初は責務を全う出来るか不安になったものだ。

だが、やる気など微塵も感じさせない彼らには、一人一人突出した個性があった。

とある貴族のボンボンは誰にも負けない強く正確な弓の腕を持っていたし、騎士団に所属する女好きは岩をも砕く剣の腕を持っていた。

地下研究室に籠っていた人嫌いは、膨大な知識を応用して治癒薬や戦略を練った。

踊り子を生業とするフェロモン垂れ流し女は異国の魔術に通じ、あたしと同じく傭兵をしている虚言癖男は棒術の達人で。

また、あたし達が魔女討伐に加わる事態を招いた元凶・老いぼれ魔法使いは魔女と同等の力を持っていた。

はたして、激戦を勝ち抜いたあたし達は魔女討伐に成功した。

でも、でもね。

あたし、忘れられないんだ。

魔女を殺した時に聞こえた――。

「サリ、本当に行くのか？」

何度目になるだろう。

貴族のボンボンは、王国を出奔しようとするあたしに問い掛けてくる。

鳶色の短髪がサラリと揺れた。切れ長の瞳はじつとあたしを見据えてくる。シャツの袖を肘辺りまで捲り上げているため、彼の鍛えられた腕が露出している。

「うん。もう決めたから」

わざわざ、まだ夜も明けていないこの刻限を選んでこつそり国を出ようとしているというのに、どうしてこのボンボンはそつとおいてくれないのか。

「だが、オマエ……王立軍へ入れてやるって国王から言われてなかったか？」

「そうだね」

「ヨルダンも、サリが城で働くようになるって馬鹿みたいに騒いでいたぞ」

「ああ……」

あたしは鼻の下伸ばした女好き騎士・ヨルダンを頭に描く。

気のない生返事をするあたしに焦れたのか、貴族のボンボン……イネスは肩を揺さぶってきた。いつも冷めている彼に似つかわしくない、真剣な表情。

「一体どうしたんだよ！ オマエ言ってたじゃないか。金になる仕事だから、傭兵やってるって。王立軍の兵士なら、傭兵やるより金になるだろう」

「間違いない。それだけは心残りかな」

あたしはふっと目元を緩める。彼の肩越しに、朝日が見えた。真っ赤な血のような。

「なら——……っ」

「あたし、忘れられない」

え、とイネスが眉根を寄せる。

「一ヶ月前のあの日……魔女の死んだ時、世界が慟哭した」

地の底が震え、空が、風が、海が川が、いつせいに泣いた。

自然も動物も、息を呑んだ。

あたしは魔女の心臓に刺した剣を引き抜くことも忘れて、呆然とその泣き声を聞いていた。

最期の力を振り絞り、少女——もとい魔女は、あたしの手に自らの手に乗せて微笑んだんだ。

溢れる鮮血が、魔女の口許を濡らしていた。

彼女は言った。

『世界の敵は、あなた達よ』

何故か、涙が零れた。

わからなかった。魔女が言いたいことなど、これっぽっちも。

なのに、嗚咽が洩れた。

すぐ後ろにいたイネスが、よろめくあたしの背を支えてくれたため、崩れ落ちずに済んだのが唯一の救いだった。

もしもこの時へたり込んでいたら、『魔女を前に臆した討伐部隊長』として歴史書に刻まれていたことだろう。

そうして魔女は、静かに息を引き取った。

「ねえ、イネス。あたしは知りたいんだ。魔女の遺した言葉の意味を。本当に、あたし達がしたことは間違いじゃなかったのかを」

イネスの手が、あたしの肩から力無く離れる。彼の琥珀色をした双眸を長い睫毛が覆い隠した。

「……道中、気をつけて」

「うん」

知ってどうする、と聞かないイネスは優しい。

討伐部隊解体後、再び地下研究室に閉じこもった人嫌いなら皮肉を込めて聞いてきただろう。

聞かないでいてくれるのは、ありがたかった。自分でも、どうしたいかまだはつきりしていない。

ただ、知りたかった。

「たまには伝書鳩でも送ってくれ」

「気が向いたらね」

軽口を叩いて笑ってみせる。それに応えるように、イネスも笑みを浮かべた。

彼の滑らかな手が、あたしの荒れた手を優しく包む。

「いつてらっしゃい」

送り出す言葉。ここがあたしの帰る場所なのだと。必ず戻ってくる場所なのだと暗喩する言葉。

それには答えず、門番へ目をやった。門番は大袈裟な門を外し、門を開け放つ。

あたしはイネスの手をすり抜け、光に満たされた外へと踏み出す。陽光に照らされた真白い世界は、静寂しじまの中にあつた。

✂

慟哭した日（後書き）

……自分で書いてて、魔女を出すの多いなと思う今日この頃。

国に脅威になる者のことを魔女と呼んだり、英雄と呼ばれるに足る者に対して畏怖を込めて魔女と呼んだり。どの立場にあるかによって魔女の定義って違いますよね。

それが好きなのかも。

この話に出てくる魔女はどんな人物だったのかは、サリが見つけてくれると思います。

花の香りと口笛（前書き）

『慟哭した日』と関連したお話です。

花の香りと口笛

芽吹きの子節はあつという間に通りました。初夏の爽やかな風がわたくしの頬を撫でます。

わたくしは逸る胸の鼓動を押し殺して、マクファールン家当主様の次子、イネス様の部屋をノックしました。

午後のティータイム。

この大役を任されるなんて、わたくしは果報者です。

いつもならば当主様やご息様方のティータイムの準備は、ベテランのメイドがおこなうのですが、当主様が主催するお茶会の準備に皆出払ってしまったため、メイド長じきじきに頼まれたのです。

この三ヶ月、真面目にコツコツと信頼されるよう努めてきた甲斐がありました。

「はい」

凜とした声が部屋の中から聞こえます。

わたくしはドアを開けて、質素な作りをしたメイド服のスカートを摘んでお辞儀をしました。

「失礼致します」

「どうぞ」

ワゴンを運び入れてティータイムの準備を始めるわたくしに目もくれず、ご息様——イネス・マクファールン様は窓の縁に腰掛けています。緩やかな風がレースのカーテンをなびかせて、鮮やかな絵画を見ている気分になります。

気分は夢心地です。

ふと、パラパラとか細い音がしたものですからそちらを見遣りますと、卓上にたくさんの書類が柔らかな風を受けて小さくさざめき合っておりまして。

こっそり内容に目を通しましたら、領地に関する書類でした。既

に署名は終わっているようです。流れるような筆跡で、イネス様の名前が書かれていました。

それにしてもイネス様。羽ペンをインク瓶に突っ込んだままにしておくなんて……少々はしたないですよ。

そんなことをわたくしが思っているなど露ほども知らないイネス様は、まだ外を見ています。あんな哀しい目をして、一体何を見ていらっしやるのでしょうか。

口笛が聴こえてきました。風に乗せるように、誰かに囁きかけるように、イネス様は口笛を吹いています。覚えのあるメロディーにわたくしは瞠目しました。

好奇心が疼きます。

わたくしは紅茶の準備をする手は休めずに、イネス様へ話しかけました。

「『サリの花を花嫁に』ですか」

曲名を当てると、イネス様はわたくしを振り返りました。これでもかというくらいに、彼は目を丸くしています。

わたくしは、メイドの身でありながら雇い主へ気安く口を聞いたことに、今更恥ずかしく思いました。自然と、眉が八の字に下がります。

「すみません。故郷の歌だったもので」

「ああ……構わない」

伶俐な顔貌のイネス様のことを、メイド仲間達は怖い人と評していたけれど、わたくしはそう思えません。何せ、イネス様はわたくしの理想に合致するお顔の持ち主なのですから。

「何をご覧になっていらっしやるのですか？」

失礼を承知で聞いてみました。お前には関係ないだろ、と突っぱねられる覚悟でしたから、

「……見る？」

と、口角を攣り上げて聞き返されたのには驚きました。

「は、はい！」

上擦った声で答えて、イネス様のお傍へと寄ります。彼は腰掛け
ていた窓の縁から下りて、わたくしが外を見やすいように計らっ
てくれました。

窓の外にはマクファーレン邸の裏庭が広がっています。その一角
に、一年を通して咲く長寿な花が溢れんばかりに咲いていました。

「まあ、サリの花がたくさんっ」

「お前、よく知ってるね」

窓の縁から身を乗り出すわたくしに、イネス様は驚いたようでした。

「はい。何せ、わたくしの故郷の花ですもの」

わたくしがにつこりと笑いますと、イネス様は「へえ……」とつ
れなく呟きました。そして、憂いを帯びた目をサリの花へと向けま
す。

わたくしは彼の横顔に魅入っていたのですが、暫くして本来の業
務を思い出しました。慌てて焼きたてのベリータルトを卓上に運び
ます。何重ものタオルでポットを包んでいたために、お湯は熱いま
までした。

安堵の溜め息が零れます。

テキパキと紅茶を陶磁器で出来たカップに注ぎます。

イネス様はそれをソーサーごと窓辺に持って行き、立ったままお
飲みになりました。この様子を見たら、お行儀が悪いとメイド長は
烈火の如く怒るでしょう。しかし、わたくしはそんな小さなことを
申し上げたりしません。主人に忠実なメイドとして、ティータイム
が終わるまで静かにしておこうと思います。

「……この国を救った、サリの名を持つ女を知っているかい」

イネス様がわたくしに尋ねたのだと気づくのに、たっぷり数秒か
かりました。

「ははははい、もちろんっ。サリ様はわたくしと同郷の方。誇りに
思っております」

サリ様といえば、この国を恐怖に陥れた魔女を討伐した部隊のリ

ーダーを務めた方です。

魔女討伐は二年半前に行われました。サリ様の名前は歴史書や教科書に記されています。

わたくしは彼女を直接見たことがなかったのですが、皆様から聞くサリ様のお話はどれも英雄然としており、胸を高鳴らせるお話ばかりです。

「――誇り、ね。あいつ……ただの傭兵だったんだけどな」

「え？」

「いや……何でもない」

いけない。わたくしとしたことが、イネス様の言葉を聞き逃してしまいました。

イネス様は形の良い目を細めます。

「あの花壇は、サリのために作らせたんだ」

「希少価値が高い花をあれだけたくさん……。さぞ心を砕かれたことでしょう」

胸に手を当てて言うと、イネス様は首を横に振りしました。

「あいつに喜んでもらいたかったから、たいへんだったとか思ったことはない。……ふっ。『イネスの屋敷は立派過ぎて気後れするか、ちよつと……』なんて言ってお茶会に誘っても全く来なかったのに、サリの花を取り寄せた途端、口笛を吹きながら上機嫌で居座るようになったさ」

とても、寂しそうな横顔です。微笑を浮かべているのに、ちつとも楽しそうに見えません。

「そうだったんですか」

イネス様は紅茶を啜って、ティーカップを両手で包み込みます。爪の色が白くなっています。力を入れているのでしょうか。

「今も時々、あいつの口笛が聴こえてくる気がして。たまらなくなる」

イネス様が喉の奥から搾り出すようにして発した言葉は、わたくしの心を揺さぶりました。

「イネス様……」

「悪い。お前は他のメイド達みたいにサリのことを話題にしないよう注意している風じゃなかったから……つい。話し過ぎた」

「いいえ、良いんです。イネス様は、サリ様をお好きなんですね」
わたくしは明け透けに言いました。

「……………ああ」

イネス様は首肯しました。

——メイドになりたての頃、彼に関する不躰な噂を耳にしたことがありました。

毎日のように舞い込んでくる結婚話をイネス様がにべもなく断り続けているのは、二年半前に突如姿をくらましたサリ様を愛していらつしやるからだ。噂を聞いた時は、討伐部隊内での功績が最も高いお二人故、根も葉もない噂を立てられているのだばかり思っていました。……どうやら、真実だったようです。

イネス様は現在、二十歳。良い家柄のご子息であれば、ご結婚されておかしくないお年でございます。二十歳で未婚など、よっぽどの事情がない限りは有り得ません。

「お前だったら、どうする？」

イネス様は窓の縁に腕を乗せてわたくしに目を向けます。

「お前が俺の立場だったら、どうする？」

わたくしは、唸りました。考え込んでしまいます。変な答えを提示するわけにはまいりません。

「そうですね……サリ様を捜しに行きます。捜して、一緒に行こう……もしくは帰ろうと申し出ます。お手紙を出されたりはしていらつしやるのですか？」

「月に一度」

イネス様の答えに、わたくしは思わず目尻を下げてしまいました。まるで、初恋に目覚めたばかりの少年のようです。

「なら、きつと大丈夫です。繋がりは断たれていないのだから」

「……………ありがとう」

イネス様は満足そうに頷きました。

その時、わたくしはようやく気づきました。彼は誰かに「サリ様を追えばいい。大丈夫だ」とそう言ってもらいたかったのだ、と。後押しして欲しかったのだ、と。

幾分すっきりした表情で、イネス様は背筋を伸ばします。彼は午後の陽射しを受けて、光に溶け込んで見えました。

その翌日のことです。

マクファアーレン家に激震が走りました。次男坊であるイネス様が、忽然と行方を絶ったのです。

使用人達の食堂にてお昼を摂っていたわたくしの隣で、お喋りな先輩メイド達がさえずっています。

「ついに愛しいサリ様のもとへ旅立たれたのよっ」

「あらヤダ、それってただの噂でしょ。前みたいにフラリと出かけたんじゃないかしら」

「気まぐれな方だもの。お屋敷暮らしが退屈だったんでしょうよ」

「愛馬も連れて行ってるしねえ。どこかの国に観光じゃない？」

ここにいる誰も、彼がどんな胸のうちを抱えていたか知りません。だから、好き勝手言えるのです。

わたくしは食堂の窓越しに、サリの花が植えてある一角を眺めます。

少しだけ開け放した窓を擦り抜けて、サリの花の香りが漂ってきます。

イネス様の口笛が、聴こえた気がしました。

星屑掴んだ（前書き）

クリスマスにちなんだ掌編になります。

星屑掴んだ

「ねー、センス」

長い黒髪を内巻きにした少女は、懐中電灯片手に胡座をかいてタバコを吸っている青年に呼びかけた。

「あ？」

無愛想な返事をする青年は、遠野小夜の方を振り向きもしない。タバコの煙が息の白さと混ざり合い、虚空に消える。

今宵はクリスマスイヴ。

にも関わらず、二人は高校の屋上にいた。

小夜の通う流桜学園高等学校は、都心から少し離れた山近くにある。

オンボロ私立高という不名誉な名を冠するこの学校に、セキユリティシステムなんてものについているわけはなく……。

一旦下校して着替えを済ませた小夜は、夜になるのをじっと待った。そして、八時を回る頃に家を出て、堂々と正門から侵入した。しかし、屋上には先客がいた。隣のクラス担任を務める諫早が。

「こんな日に、どーしてここにいるわけ？」

小夜はからかい混じりに軽口を叩く。

諫早は背を向けたまま鼻を鳴らした。

「……うつせえ。遠野こそ、どうしてここにいんだよ」

「彼氏がなくて、なおかつヒマだったからでーす」

軽い口調で言う小夜に、諫早はようやく振り返った。手元で懐中電灯の光が、冴えた面立ちを照らし出す。

「あのなあ」

眉根を寄せた諫早だったが、「ま、いつか」と頭を掻く。怒るとさえ馬鹿らしくなったのだろう。

小夜は、諫早が受け持つクラスの少女から聞いたことを思い出す。

諫早は生徒の素行について口出ししないから楽だ、と少女は言っていた。

教師としてそれでいいのかという疑問が湧く。しかし、だからといって彼のクラスで問題が起こったことは一度もない。

運が良いのか、自由にさせているのが幸を成したのかは定かでない。

そんな諫早は、屋上の端で何やらもそもそしていた。

冷えた手をダツフルコートポケットに突っ込んで、小夜は諫早へと近づく。黒のタイツを履いているにも関わらず、寒風が痛い。

「……何してんの？」

「お子様には言えねえな」

どうにかして見てやろうと首を動かすが、諫早はそれをうまく阻止する。小夜はムツとして唇を尖らせた。

「ケチ」

「ケチで結構。てか、早く帰れよ。もう九時だぞ」

諫早の尤も過ぎる発言に、小夜は怯んだ。視線が足元に落ちる。

「……………帰ったところで、だーれもいないし」

「あつそ」

「ヒドッ！ 普通、センサーなら『両親は？』とか『何か悩みでもあるなら聞くぞ』くらい言わない？ 諫早センサー最低」

諫早は悪びれた様子を一切見せずに言い放つ。

「生徒らしい奴には先生らしく接し、先生を先生とも思わねえ糞ガキにはそれなりの対応を、ってのが俺の信条でな」

「ふんっ」

言い返す言葉が見つからず、精一杯の反抗心を込めて小夜はそっぽを向いた。

諫早は何やら組み立てているようだった。小夜は屋上の入り口に体育座りで寄り掛かる。遠くからクリスマスソングが聴こえてきた。「クリスマスなんて、嫌い」

ポツリと呟く。すると、予想外なことに返答があった。

「奇遇だな。俺もだ」

小夜はクスリと含み笑う。両手の指を交差させて、諫早に尋ねる。
「何々、センセってば……フラれたの？」

「ハッ、彼女なんて煩わしいもん学生時代に卒業したぜ」

「なんだー。違うのか……残念」

口にしながらか、小夜は豆粒みたいなネオンの光に煌めく街を眺望した。

幸せな明かり。喜びに湧く街を彩る街路樹に、たくさんの笑顔を運ぶクリスマスツリー。

小夜は俯いた。涙が零れそうになる。

そんな彼女の頭に、ポンと温かな掌が載せられた。そつと目線を持ち上げると、目の前に諫早が口角を吊り上げて佇んでいた。

「しょうがねえな。特別に、見せてやる」

「何を？」

「星」

そう言って彼は、ダッフルコートに突っ込んでいた小夜の手首を柔らかく掴んだ。背筋が凍るくらい、諫早の手は冷たかった。

言われるがまま、小夜は望遠鏡を覗き込んだ。

「うわっ」

思わず声を上げる。

街明かりに掻き消された、数多の星。

圧巻の光粒を前にして、言葉を失くした。

ふと、視界がぶれる。諫早が小夜を押し退けて望遠鏡を覗き込んだのだ。

「どれどれ……おお、今年は当たりだ」

「——センセ、綺麗だねえ」

ぐつと空を見上げる。見えない光は、遠野達へしんと降り注いでいて。

「本当は独り占めするつもりだったんだけど。……なあ、遠野。こうして今、この場所から見える星は全部お前と俺だけのものだ」

「何、それ」

「何物にもかえがたい、素敵なクリスマスプレゼントだろ」

「……ガキくさ……」

——幼い頃の情景が蘇る。

ふつくらとした笑顔を振り撒く可愛らしい少女。そんな彼女を穏やかな眼差しを向ける母親。二人を遠くから見ている痩せぎすの少女。

「ああ、これだからお子様は嫌なんだよ。全くロマンを解しちやい

——」

「……センセ……」

「ゲッ！ おいおい、泣くなって」

慌てふためく諫早を前にして、小夜は奥歯を食いしばった。

しかし、涙は絶え間無く流れ続けて。

「ご、ごめんなさ……。わた、私……プレゼントもらったこと……なくて……っ」

ピタッと諫早が動くのを止めた。

「遠野……お前……」

「私の妹、センセ知ってるでしょ？」

「そりゃ…… magari なりにも俺はお前の妹の担任だからな」

小夜の妹である陽菜は、^{ひな}諫早が受け持つクラスの生徒である。小夜と陽菜は双子だ。二卵性のため、見た目も性格も似ていない。

「じゃあ、うちのお母さんにも……会ったことあるよね？ 三者面談とかで」

「ああ」

当たり前だと諫早は首肯する。

「センセは知らないと思うけど——」

小夜の表情に影が差した。

「お母さん、私の三者面談には一回も出てくれたことないんだよ」
諫早の瞳孔が縮まった。彼はくわえていたタバコを吸い殻ケースに入れる。

「昔からそう。私と妹が物心つく前にね、お父さんが愛人のところへ行っちゃったんだって。私は……お父さんに似てるから、お母さん的には眼中に入るのも嫌みたい。軽度のネグレクトって言うの？ 近所のおばちゃんが私を心配してさー、児童相談所に通報したこともあったなあ」

フツツと小夜は笑う。鼻先が冷たくなっていく。言いようもない、孤独を感じた。

小夜は立ち上がり、上を向く。自分の吐く息が白く濁って空気と同化した。

「別にご飯食べさせてくれなかったり、服を買ってもらえなかったりしたことはないけど。必要最低限のお金は渡してくれるし」

でも、と小夜の瞳の奥が揺れた。

「イベント事はぜーんぶ妹と二人で済ますんだよ。私は、一人でお留守番。センセ、私ね……小さい頃、クリスマスにお母さんと妹が帰ってくるのを玄関口でずーっと待ってた。でも結局、その日は帰って、来なかった」

涙と言葉がボロボロと零れ落ちた。

「ありがと、センセ。プレゼント……嬉し——」

「もういい。わかった」

刹那、強い力で抱きしめられた。

ヤニ臭く、温かな腕。ジャンパーの柔らかさが小夜を包み込む。

小夜は静かに目を閉じた。

「……俺も、遠野と一緒にだよ」

ややあつて、諫早は口火を切った。

「え？」

「俺の両親って子供に無関心な奴らでさ。クリスマスだからって急いで家に帰ってみても、誰一人いやしない。両親共々、愛人とロマンチックなひと時を過ごしてるわけよ。いや、幼心に傷ついたね」

小夜を抱きしめたまま、諫早は言った。軽い口調で話しているが、辛いに違いなかった。

「諫早センセ……」

「だから、俺は考えた。馬鹿どもがありきたりなプレゼントに喜んでいる中、金にもかえられない……すごいプレゼントを自分に贈るんだって」

「考えた結果が……星……」

小夜が小さく笑うと、諫早は不機嫌そうに、

「……ガキの頃考えたもんを笑うな」

と文句を垂れた。

小夜は笑いながら諫早の腕から離れる。そして、望遠鏡の近くに寄った。

「もう一回、望遠鏡覗いてみてもいい？」

「いいぞ」

右目を瞑って、真冬の星空を見つめる。

小夜は、望遠鏡を覗き込んだまま手を伸ばした。ぐっと拳を握りしめる。

彼女は望遠鏡から目を剥がして、フェンスに寄り掛かっている諫早の前に立った。そして、彼に二つの拳を突き出した。

「センセ、手え出して」

唐突な小夜の要望に首を捻りながらも、諫早はあかぎれの手を差し出す。その手に、小夜は自分の手を重ねた。

諫早は目を丸くする。

「今ね、たくさん星を掴んだんだ。だから、センセにもおすそ分け」
子供過ぎるだろうかと小夜は羞恥に頬を赤く染めた。しかし、一度口にした言葉を引っ込めることは出来ない。

呆気にと取られていた諫早の口許が緩む。彼は小夜の手を優しく握りしめた。

そんな二人を見ているかのように、雪がさざめき出した。

「さあて、冷えてきたことだし……帰るぞ」

「あつ」

諫早は望遠鏡を脇に挟むと、小夜の手を引いて非常階段へ向かい出した。

「私、まだ――」

帰りたくない。

教師である諫早には言うべきでない本音が、喉元に押し迫る。

元気が萎んでいくような気がした。

諫早はドアに手をかけた。

「今日、当直は俺一人。当直室は非常に暖かい。しかも、イヴに当直番という世間一般からすれば貧乏くじを引いた俺に同情した他の先生達が、チキンやケーキや、その他諸々の差し入れをくれた。どうだ？」

「どうって言われても……」

諫早は小夜を振り返り、舌打ちする。

「鈍いな、お前。一緒に当直室でクリスマスディナーでもしないかって言ってるんだよ」

「――うん！ うん！」

弾けんばかりの笑顔で、小夜は頷いた。

孤独じゃない。

隙間を埋める諫早のぶつきらばうな優しさ。

父親や兄、それに似た何かを慕うような気持ちを胸に、小夜は彼の腕に抱き着いた。

諫早は照れたのか軽く腕を引こうとしたが、本気で嫌がるそぶりは見せない。

二人は薄暗い階段を、しっかりと手を繋いだまま下りていった。

真実の紐解き（前書き）

すごく短いです。

真実の紐解き

少年がうずくまっていた。

彼の大きな瞳に、涙はない。黒曜石色の艶やかな髪は砂埃に塗れている。

そこらじゅう、見渡す限りに焦土が広がっていた。大地に呼応するかの如く、空さえ鈍色で。

鮮やかな色彩など一つも見当たらない。

炭と化した木々に田畑、干上がった川。

少年は下唇を噛み締めた。一筋の血が顎を伝って地面に滲む。

「——ごめん」

誰に言ったとも知れない言の葉を、枯れた風がさらう。

と、少年の下で紅葉のような小さい手が動いた。彼は慌てて上体を起こした。

そこにいた生後間もない赤ん坊は、無垢な笑い声を上げて少年に手を伸ばす。

「……鈴子……お前を殺すくらいなら、こうする方がまだ良い……」
ここで初めて、少年の双眸から涙が溢れた。

麻布にくるまれた赤ん坊を抱きしめ、彼は泣いた。
声を押し殺して、泣いた。

三日前、^{くにがわ}国境にある一つの集落が息を止めた。

集落の者達は全員殺されていたため、真実は闇に消えた。

『死人に口なし。他国が攻めてきた形跡は非ず』

一帯を治めている殿様は、そう言ったという。

近隣に住む人々は噂し合った。

『あの集落には、忌まわしい風習があつたんだよ』

『へえ』

『六年に一度……赤子を山神様に献上するのさ』

『なんだそりゃあ！ どうして、そんな惨いことするんか』

『聞いた話じゃ、あの集落が今まで戦や不作の被害に遭わないですんだのは、そうして山神様のご機嫌を取ってたかららしい』

『……可哀相に』

『きつと、バチが当たったんだ。赤ん坊達の無念と、その親の妄執が集落を消したんだよ』

『そうだねえ』

誰も知らない。

幼い妹のために集落を焼き、逃げ惑う人々を一人残らず殺した少年を。

贅となる定めにあつた幼子を。

二人が辿った行く先を。

そして。

集落にあつた、忌まわしき風習の全貌を。

——真実はまだ、何一つ紐とかれていない。

終演を切望します

黒き帳とじを跳ね退けて、くつきりと満月は輝いていた。

窓枠に手をかけた女は無言のまま、透き通った瞳を瞬かせる。

陽を反射して輝く湖のような肌の白さは危うい色香を放っており、月光に淡く浮かぶ金の髪は綿雲のようにフワフワしていた。ぽとりとした小さめの唇は野いちこの可憐さ、蒼穹そうきゅうを凝縮した大きな双眸は長い睫毛に縁取られている。

ネグリジエは襟ぐりが大胆に開いたタイプで、剥き出しとなった肩から首筋までのラインがたいそう悩ましげである。

女と対峙する青年は、こくりと喉を震わせた。

薄汚れた外套から手を出し、キャンドルホルダーを持った彼は、

栗毛の隙間から見え隠れする同色の目を眇すがめた。

「ジ・エンドだな」

「そうね」

「……………ロゼ」

「なあに、シェパード」

「外界は今、バレンタインで盛り上がってるよ」

「あら……………そうなの？ ごめんなさい、知っていればカードを用意したのだけど」

「必要ない。こうして今宵、君と会えたことだけで胸がいっぱいだ」

「あらやだ。シェパードのくせに、口が上手くなっちゃって」

二人は軽口を叩いているが、どちらも一寸の隙さえ見せない。

シェパードは、おもむろに銃の引き金を引いた。

銃声は静寂の森に反響し、鳥達が騒ぎ立てる。

弾がロゼの肩へめり込んだ。彼女は血が滴る左肩を押さえた。

「やっとな……………終わるのね」

俯きがちにロゼが呟いた。

煙が立ち昇る銃口をロゼの心臓へ向け、シェパードは唇を弓形に歪めてみせる。

「ああ。これで終わる」

「長かったわ」

「……悪かった」

シェパードは短い謝罪の言葉を吐いた。

ぐらりとロゼの体が傾ぐ。反射的に、シェパードはその体を抱き止めた。キャンドルホルダーは床に置く。

ロゼのか細い腕が、彼の首に回った。小さな口にちらつく牙がなければ、ただの女に見えるだろう。

ロゼはシェパードの頬に己の手を添えた。血が凍っているかの如く冷えた掌は、やがて彼の首筋まで降りてくる。

「愛してる」

「……わかってるよ」

苦悩に満ちたシェパードの顔を見て、ロゼは痛々しげに瞳を伏せた。

「あなたって、本当にお人よしね。私を見つけるために、バンパイアハンターとなったんでしょう」

シェパードは答えなかった。無言は肯定と同じ意味を持つ。

「あんな、白昼夢同然の邂逅を覚えていたなんて——」

「忘れるわけがない。六年前、俺は君に救われたんだから」

「おバカさん。あれはただの気まぐれ。散歩をしていたら怪我をしたあなたに出会ったから、血を分けたまで」

「……君にとつては気まぐれだったかもしれない。だが、あのまま森の中で動けずいたら……死んでいた」

シェパードはロゼの手首を掴むと、自らの腕に閉じ込めた。

「……だから、終わらせる」

「あら、助けてはくれないの？」

可愛らしい声でロゼは問うた。

シェパードは低く笑う。

「望んでないくせに」

「……」

「『あなたに私の全てを捧げ、朽ち果ててしまえたらいいのに』。君はあの時、そう言った」

シエパードの腕が緩んだ。ロゼはゆっくりと視線を上げる。

栗色と蒼穹の目が合わさる。

「終わりを望んでいるんだろう？」

シエパードが聞けば、ロゼは頷いた。

なら、とシエパードは銃口を彼女の左胸に宛てがう。

「他の誰でもなく——俺が終わらせてやる」

その言葉には狂気が見え隠れしており、切なる独占欲が滲んでいる。

「ちゃんと、一思いに殺してね。さっきみたいに急所を外して痛め付けるなんて真似しないで」

「ああ。——ロゼ、安心しろ。すぐ俺も後を逝く」

潔く言い切ったシエパードを前に、ロゼは安堵の表情を象る。真白い彼女の頬が微かに色づき、透明な雫が滑った。

「ありがとう」

銃声が立て続けに二発、そして遅れて一発響いた。

鬱蒼と茂った森に囲まれた廃墟の一階で、男女が折り重なるように倒れていた。

女のフワフワした髪が埃の積もった床に広がっており、窓から漏れる神秘的な月光を受けて煌めいていた。左肩には銃弾を受けた跡がある。心臓には杭が打ち込まれていて、彼女がバンパイアだったであろうことを暗に示している。

そんな女を守るかのように倒れ伏す青年は、右手に銃を握ってい

た。こめかみからは血を流していた。

二人を頼りなげに照らす蠟燭が、掻き消える。

一切が見えなくなった。暗幕が垂れ、全ては常闇へ還る。

✕

終演を切望します（後書き）

ずつと書きたかったバンパイア物！

六年前、シェパードは親しい友人の裏切りにあつて足を骨折してしまいました。そして、森の中で一人取り残されてしまったのです。

そこへ偶然ロゼが姿を見せて、バンパイアの血を与えます。不死者の血をもらったシェパードはすぐに回復。森を去りました。

彼はロゼに再び会うべく……彼女の望みを叶えるためにバンパイアハンターとしての道を歩み始めたのです。

ロゼを追っていくうち、シェパードは彼女に惹かれていた自分に気づきます。そして、ロゼも……。

想いを自覚し、シェパードは苦悩します。愛している相手は切実に死を望んでいる。助けてもらった恩を返す決意が揺らぎます。

しかし、バンパイア狩りが激化し、同胞を守るため護身などなぐり捨てて立ち向かってくるロゼの前に、シェパードは覚悟を決めます。

他の誰でもない、自分が彼女を楽しむのだ、と。

……つていうのを話の中に盛り込む予定だったのですが、長ったらしくなりそうな予感がしたため止めました。

壊れたオモチヤ（前書き）

結構、エグいかも。

ホラーではないけど、異常です。

壊れたオモチヤ

遮光カーテンをぴったりと閉めた室内には、パソコンのモニターの青白い光だけがあった。

ぶつぶつと念仏か何かのように低い声がする。

部屋のすみに敷かれた布団の上に一人の少年が体育座りで縮こまっていた。もつさりとした髪が、彼の暗い顔をより暗くする。

少年は血走った目で床の一点を見つめていた。

何かに怯えているのか、しきりに震えていた男は、やがて唇をめぐり上げる。

そして、金切り声で笑い出した。手足をジタバタさせ、歯を剥き出しにして笑い立てる。

冷たい床には、血が付着した包丁が置かれていた。

「悪い、遅れた！」

申し訳なさそうに両手を合わせながら場に現れた平間篤^{へいまあつし}を見た途端、女子大生達は一斉に表情を明るくした。

篤はモテる。長い手足と鋭利な顔立ち、気さくな態度。薄茶に染めた髪は軽薄さを醸し出し、いかついピアスが存在を主張していた。今時の若者である。

「おっせえぞ、篤！ 皆待ってたんだぜ？」

ビールジョッキ片手に青年が笑った。

「だから、悪かったって。道が混んでてさ」

大学同士の親睦会という名の合コンは、和気藹々（わきあいあい）としていた。

「んじゃあ、篤も来たことだし……飲み物頼むぞー」

はーい、と皆が答えた。

女子大生達は篤がどこに座るかソワソワしている。

篤は適当に空いている席へ滑り込む。

自分の隣へ篤が座らないのを知るや否や、女子大生達は興味を他の男に向けた。

篤の左には男、右には女が座っていた。彼は迷いなく、右に座る女へ笑いかける。

「いきなり割り込んでごめんな。君、見ない顔だけど…… A女子大の子？」

爽やかに尋ねた。当たり障りない、軽い質問である。

女は重ためのボブヘアを揺らして、篤を見た。

胡乱な双眸は酷く濁っている。彼女は篤の質問に答える気配など微塵も見せず、ただこちらを見つめてくる。

「えっと……」

戸惑った篤は手元にあったビールで喉を潤した。

他の者達に助けを求めようにも、皆近くに座っている者とお喋りに興じている。

くくつと喉で笑う声が耳についた。

篤は眉間に皺を寄せて振り返る。

そこには焼酎を飲む男がいた。

独特の雰囲気を持つ男である。全身黒で固め、髪まで漆黒だ。つり上がった奥二重の瞳と視線が合う。

彼は氷を指で回すことを止め、赤い唇で笑んだ。

「みーつけた」

背筋に悪寒が走った。一気に体温が低下する。

「……人殺し……」

か細い女の声が這う。

ハッとして右側に座っていた女に目を配った。彼女は膝に置いた両手を握りしめる。

篤の動悸が激しく鳴った。誰か助けってくれ、と視線を左右に動か

すが、誰も彼もがこちらの状況に気づかない。

「誰にも気づかれず、一生を終えられるとでも思っていたの？」

黒髪の男は唇をほとんど動かさずに囁いた。

「何人もの罪なき人を殺して、楽しい？」

女は睨みを利かせながら言った。

脂汗が噴き出す。

篤は思わず、その場を逃げ出した。

頼りない街灯が公園に点在している。

篤は上がった息を整えるため、背中を丸めた。

（あの二人……一体、何なんだ！）

吐き気がする。血のにおいがする。

甘美な悲鳴、芸術品さえも凌駕する迫りくる死を感じた人間の顔。赤い記憶が篤の中で回る。

おかしい。

これまで、殺した者達を思い出したことなんてなかった。

彼が殺人を犯すのは、刹那の快楽を得るためだ。

殺してしまえば、ただの壊れた玩具。余韻を楽しむことはない。

淡々と殺し、淡々と処理する。

篤は止まらない汗を拭った。

殺人の後処理は完璧だったはずである。どこにも彼が犯人だとわかるような痕跡は残していない。

その証拠に、今の今まで警察は篤を逮捕出来ていない。

（なのに、あいつら……！）

全て知っているような口ぶりだった。

「無駄だよ」

ひやりとした言葉が公園にこだます。

暗がりから先ほどの男が姿を現した。彼の後ろにはボブヘアの女もいる。

「お前ら……何なんだよ！」

じり、と後退りながら篤は叫んだ。

男は余裕に満ちた双眸を瞬かせた。

「……あんたを殺して欲しいと、ここにいる仲里英恵なかざとはなえから依頼を受けた者」

「はっ？」

衝撃的な答えに、声が裏返った。

英恵は一步前に進み出る。

「あなたは……私の半身であつた姉を殺した」

「何を馬鹿な。証拠は！ 証拠はどこにある！」

血走つたギョロ目で篤は吠えた。

風を受けてブランコが一人でに軋んだ。

「証拠は私」

感情をこそげ落とした顔で、英恵は自らの胸に手を当てた。

「双子であるが故、私達は互いが体験した出来事を共有していた。

私は、あなたが姉をなぶり殺したビジョンを克明に見ている」

馬鹿な、と篤は唾を吐き捨てる。

「そんなの何の証拠にも——」

「だから、俺がいる」

篤の言葉を男が遮る。

男は腕を組んで、侮蔑の色を浮かべた視線を篤へ向けた。

「さあ、死ぬ覚悟は出来た？」

「ま、待てよ！ 濡れ衣かもしれないだろ？ その女の狂言かもしれない」

「かまわない」

男はにべもなく言った。

一步、一步と男が近寄ってくる。

「俺はきちんと調べた上で依頼を受ける。あんたは黒だ。久々に、腕が鳴るよ」

「あ……あ……」

体中から力が抜ける。

男は革手袋で篤の前髪を掴み上げた。

「人殺しーっ！」

金切り声で篤は叫んだ。恥も外聞もない。逃げようともがく。しかし、逃げられない。靴が虚しく砂を撒き散らすだけだ。

男も英恵も汚らしいモノを見る目で篤を見下ろす。

「最期に言っておく。俺は人殺しじゃない」

彼は篤の耳に唇を寄せた。

「心殺しだ」

篤の中で、何かがせり上がってくる。

男はなおも小声で囁き呟く。

「あんたは七歳の頃、意に染まぬ殺しを行なった。隣の家の猫だ。六つ年上の兄に言われて行なったことだった。それで精神を病んでしまえばまだ良かったろう。だが、あんたは猫が絶命する直前の顔にある種の快感を覚えた。そして、次第に人間を殺すことへ関心を持つようになる。ああ、殺人鬼の出来上がりだ」

「や……やめ……」

脳みそが捻じ曲がるような気持ち悪さがする。

「あんたは優秀な頭を持っている。綿密な計画を立てて何度もシミュレーションを重ね、犯行に及んだ。手口は全てバラバラで、同一犯とは思えない。対象とする被害者の年齢・性別・面識も雑多。自分にかなり近い人間を殺さなかったあたり、分別はあったということか」

ぐるぐる回っているのは頭の中なのか、それとも目玉なのか、最早篤にはわからない。

「人間は玩具。玩具に自分の経歴に傷を負わされるのは嫌だ。だから、近い人間は殺さない。思考回路が腐っている。でも、少しわかるよ。自分が全ての采配を振るう神になった感覚が好きだったんだろう？ でもね——」

俺は篤の耳たぶを強く引っ張った。そして、体の奥底へ届くように、はつきりと言った。

「今、玩具はあんただ。……………死にな」
パチン、と意識が途絶えた。

英恵は涙に濡れた目を擦った。

姉を殺した憎き殺人犯は、一欠けらの証拠も残していなかった。
だから、顔や名前はわかつているのに捕まえられなかったのだ。

自分があいつを殺して、姉の仇を取ろうと決意した英恵は友人からある噂を聞く。

『殺したい相手を殺してくれる大学生がいるらしい』

噂にはたくさんのおひれ尾鰭がついていて、彼に行き着くまで半年かかった。

それが、今悠然と佇んでいる真淵有希であった。彼は親身に英恵の話の聞いてくれ、数日経って、依頼を受けると言ってくれた。

英恵はそれだけで救われた気持ちになった。彼女の話を笑い飛ばさず、妄想だとも精神病だとも言わなかったのは彼だけだった。

「真淵君、ありがとう」

「いいよ」

「あの……………少ないけど」

英恵は薄紫色の封筒に入れた金を差し出す。

真淵は目を丸くして首を横に振った。

「礼は要らないって言ったじゃないか」

「でも……………でもね……………」

英恵の声が震えた。鼻水が垂れる。

「私の復讐のために、真淵君を巻き込んだじゃったし」

ああ、と真淵はポケットに手をつ突っ込んで夜空を見上げた。その横には口を開けたまま瞬き一つしない、平間篤の姿がある。命さえあるものの、彼はもう考えることも喋ることも出来ないだろう。

「それを言うなら、俺が金を払わなきゃいけないくなる」

「え……？」

木枯らしが落ち葉をさらい、空へ巻き上げた。

真淵は顎を引き、赤い唇を開く。

「これは、俺の復讐でもある」

英恵は彼の真意を掴めず、首を傾げた。

「……いつか、この手で葬らねばならない奴がいる。そいつの心を確実に殺すため、俺は他の犯罪者達を相手に実験をしてるんだ」

どんなふうに言えば人の心は死ぬのかを、と真淵は拳を握りしめながら言った。

暗い瞳がぎらついて見える。

「私……それでも嬉しかった」

「……」

「ありがとう」

淡く微笑めば、真淵も目を細めた。

「どういたしまして」

彼はゆっくりと歩き出した。そのあとに英恵も続く。

糸が切れたマリオネットの如く、平間は地面に倒れていた。

遮光カーテンをぴったりと閉めた室内には、パソコンのモニターの青白い光だけがあった。

笑い疲れた少年は、人形のような無表情さで布団に転がっていた。

眦から血の混じった涙が伝う。

家の外がうるさい。

けたたましいサイレンの音がした。

階段を駆けのぼってくる無数の足音が聞こえてきた。

少年はじっとドアを凝視する。

鍵を叩き壊す勢いで警官が雪崩れ込んできた。

「少年がいます！ 生きているようです！」

「ああ……これは……」

警官の一人は顔をしかめる。

少年の腹には包丁で突き刺された跡があった。部屋の対角上には母親がうずくまっている。

「大丈夫ですか？」

「フヒヒヒ、ヒヒヒ」

「駄目だ。母親の方は狂ってる……」

「ショック状態か、それとも……。おい、薬物検査を」

「はい！」

警官に抱えられ、部屋を連れ出される母親を少年は目で追った。

「……………あ……………」

少年は喘ぐように口を開く。しかし、誰もそれを聞き取った者はいなかった。

『ヒヤハハハハハハハハハハハハ！』

狂気の雄叫びが少年の耳にこびりついて離れない。

（兄さん、どうして？）

涙はとめどなく溢れ、布団を湿らせる。

✕

壊れたオモチャ（後書き）

『エンゲージ』以来の狂気モノです。

他の作品にも色んな形で狂気が顔を覗かせていますが（『青薔薇の恋』のブルーしかり）、それを全面に押し出した小説を書いたことは少ない……はず。

狂気や異常性って、書くのが難しいです。

カンバスに流れる雨

校舎一階の最東にある第二美術室には強い西日が差し込んでいた。赤みを帯びた黄金色の光の中、おさげの少女は一心不乱にカンバスへ色を乗せていく。その顔は酷く無表情で、何の感慨も浮かんでいない。

彼女は梅雨が明けたばかりの蒸し暑い教室内で、クーラーもつけずに窓を全開し、じっとりと肌を汗ばませていた。半袖のブラウスから白く棒切れのような二の腕が突き出ている。

校庭の喧騒も、放課後に女子達が集まって行なうお喋りも、彼女とは無縁のもので。

ポーン、ポン、ポン。

背中の方——窓際の方からボールの跳ねる音がした。野球部がサッカー部のボールが入り込んできたのだらう。

たにくぼゆうか
谷窪優花はゆっくりと体を窓へ向けた。今にも足が取れそうな丸イスが嫌な音を立てて軋む。

「……すまん」

外へ続くドアのところ以身長の高い少年が立っていた。彼は転がったサッカーボールを拾う。

逆光のせいで少年の顔が見えない。まるで影絵か何かのようだ。綿雲が太陽にかかる。西日が弱くなった。

少年はサッカー部のユニフォームを着ていた。彼の黒髪は、柔らかな緑や空の淡い色彩の中で異質に見える。右目の下にある涙ボク口がとても印象的だった。

優花は突然現れた少年の双眸を見つめる。しかし、少年の瞳には優花など写っていない。彼の目は優花を飛び越えた先を見ている。

「綺麗な青だ」

唐突に、落ち着いた声で少年は言った。

「ああ………これ？」

優花は絵の具で汚れたエプロンの端を引っ張りながら、描きかけの絵に興味なさげに見やる。

「純粹な青じゃないけど。あなたの目には青に見える？」

「ああ」

「ふーん」と優花は頷き返し、カンバスに爪を立てた。まだ乾ききっていない絵の具が爪に入り込んだ。

少年は何も言わず、優花の行動を観察している。

「コバルト、マゼンダ、シアン……。思いつくまま、何もなかった空間を埋めた。ただ、それだけの作業」

「……つまらなそうだな」

淡々と少年は意見を述べた。それは何も飾らない、心の奥底から出た言葉だと優花にはすぐわかる。

「うん、つまらない」

「そうか」

短い会話だった。

少年は身を翻し、日の当たる校庭へ戻って行った。

優花は台なしにしてしまった作品を、未練なく床へ落とした。海とも空とも見える青が、震える。

はあ、と頭を掻いた。

（またやってしまった……）

こうして作品を捨てるのは、七月になって一体何度目だろう。コンクールが近いというのに、由々しき自体である。

——優花は、自分の琴線に触れた微かなもの。それを手繰り寄せ、カンバスへ塗りたくる。

顧問の先生もどこかのお偉い先生も、優花のそれを天才的だと褒め称えた。

コンクールに作品を出してみると言われて出品すれば、大賞や金賞をもらう。同じ美術部員達はそれを羨ましがった。どんなモチーフで描いているのか。どんな視点で物事を見ているのか。しきりに尋ねてきた。

優花はそれを厭い、いつからかこの第二美術室にて一人で作業を行なうようになった。本来、第一美術室が美術部の活動拠点である。この教室は物置同然の扱い。美術の授業教材や廃棄処分を待つ作品が教室のすみにはうず高く積み上げられている。

それでも良かった。

何の雑念を入れず描くのに、ここはうってつけの場所である。

……ようやく安寧の場を見つけたというのに。

優花の中には一抹の焦燥があった。

（描けない）

正確に言えば描くことは出来る。しかし、違和感があるのだ。違和感などどこにあると言われてしまうと答えに窮してしまうが、それは優花を着々と追い詰めてくる。

原因には思い当たる節があった。

二ヶ月前に描いた、あの作品だ。

ギリ、と親指の爪を噛む。優花は唇を三日月に歪めた。

「馬鹿じゃないの」

吐き捨てるように呟いた言葉は、誰でもない——自分に対しての言葉だった。

彼女は苦悩していた。

サッカー部に所属する少年の名は、白糸環しろいとたまきと言つらしい。

優花がどうやってそれを知ったかと言うと、先ほど偶然にも彼のことを耳にしたからだった。

この高校で黒髪の生徒は少ない。黒髪で……しかもサッカー部に所属しており、右目下には涙ボクロがあると来たら、あの時の少年に間違いなかった。

「白糸君ってホント無口」

「でも、そこが魅力じゃん」

「サッカー部の司令塔だし。うちの高校が全国大会行けるのって、ぜったい環くんの力が大きいよねー」

優花は数学の宿題を解きながら、何とはなしにその話を聞いていた。

美術室で出会った時はそんな有名な人だと思わなかった。

しかし、自分とはあまり関わりなき事柄である。優花は宿題を解き終わると、机に突っ伏した。

「何故、廊下側を向いて描いているんだ？」

放課後、当たり前のように環は第二美術室へやって来た。

優花が校庭へ視線を転じると、サッカー部員達は各々走り込みや筋トレをしているのが目に入る。自主練中だろうか。

優花は環に目を向けず、目の前に悠然と横たわる大きな白いカンバスを見つめる。

「外なんて見ても、何も浮かばないもの」

それに暑いし、と付け足せば、環は小さく笑った。

野球部やソフトボール部のノック音がこだまする。

ちらりと環を横目見た。彼は美術室に入って来ず、窓枠にひじをかけて空を仰いでいた。

「ねえ」

その背中に、思わず呼びかけてしまう。そうしなければ、彼が景色に溶けてしまう気がした。

ずっと環は室内に顔を向けた。切れ長の双眸が寡黙なイメージを引き立てる。

「白糸君ってサッカー部の司令塔なんですよ？」

彼は目で頷いた。

「どんな風にサッカー、やってる？」

環は質問を吟味するように押し黙り、やがて口を開いた。
「直感」

「……そう」

優花は少なからず落胆した。

環の答えは優花のものと同じだった。それでは意味がないのだ。

優花が知りたいのは、それ以外の感覚である。

彼女が焦れていることに気づいているのかいないのか、環は冷静な声色で言葉を紡ぐ。

「後は、メンバーのポジションと敵の飛び出し方がある程度予測しながら動いてる。セオリーどおりで……つまらないが」

彼は自嘲的に最後の言葉を発した。

「へえ……白糸君もつまらないなんて思うことあるの」

「もちろん。……俺はもっと、相手の意表をつく攻撃に出たい。それが最善だと思ったんだ。だが、メンバーはそれに納得してくれない。実力があるのはわかるが、あえて奇をてらうのはどうかしてる」とさえ言われた」

少しだけ環の口調が強くなる。

「ちよつと、わかるよ」

優花はシアンをキャンバスにほとばしらせた。

「私もそうだから」

「え……」

「二ヶ月前に、ある作品をコンクールに出品したの。それは特別賞を受賞した」

優花は眉根を寄せる。拳を握りしめた。

「その作品を見た人達は言った。こんなの、谷窪優花の作品じゃないって」

環の方へ振り向き、優花は笑った。

「初めて……魂込めて描いた作品だったのにね」

モチーフを持って描いてみなさいと画家である父親に言われ、半年かけて完成させた作品。

結局、それはコンクールにて特別賞という微妙な評価をもらったのだが、いまだにその評価は優花にとって全く理解不能である。

自分の作品で唯一自信を持つて誇れるとしたら、その作品だけ。
それが大賞を取れないのならば、他人の評価などたかが知れていると優花は思い始めていた。

綺麗、繊細、透き通る、脆さ、ある種の純粹さ。

彼女の他作品が大賞を受賞した時の評価である。下らない言葉を並べ、テーマもクソもあったものじゃない作品を褒め千切るその傲慢さに、無性に腹が立つ。

「まるで別人が憑依して描いたような意味なき絵が良作で、全身全霊をとって描いた作品が駄作。……馬鹿みたい」

コンクールの結果が出た後、優花は抜け殻状態になった。
それからだ。

何を描いても気に入らない。ほつれているような、違和感。イライラ。

他人の手で描いた倒錯感だけしか残らない自分の作品達に、愛着など持てない。何度も打ち捨て、何度も塗り潰す。

痛ましげに俯く環に、優花はハツとした。

「……ごめん。変なこと言った」

謝罪の言葉を口にする、環は小さく首を横に振った。彼は何か言いたげに瞳を持ち上げ、すぐに逸らす。

「環ーっ！ コーチが来たぞーっ！」

遠くから坊主頭のサッカー部員が叫んだ。

「じゃあ」

言つて、彼はスパイクで砂を蹴り上げ去って行った。

光の届かない廊下側。そこは心持ち涼しい。

なのに、何故か暑く感じた。優花は自らの胸に手を押し当てる。
初めてだ。

自分の思っていることを他人へぶつけたことなど、今まで一度たりともなかった。

それを、環に投げた。彼は押し返しもせず、黙って聞いていてくれた。

（本音を吐き出すと、こんなに胸が熱くなるんだ）

炭酸水を一気に飲みほした後のような清涼感が広がる。それは心地悪いものではない。むしろ――。

凝り固まっていた感情が流れ出す。久しぶりに、穏やかな気持ちになれた。

翌日は、生憎の雨だった。今日は何だか美術室へ向かう気になれない。

優花は放課後になると一目散に下校した。お気に入りの蓮の花がプリントされた傘を回す。

雨音が耳をくすぐった。

横断歩道の中間地点まで来た時、信号が点滅し出す。水溜まりを避けながら、急ぎ足で渡りきった。そして、すぐ側の脇道へ入り込む。後は平坦な道が続くばかりだ。

優花は傘越しに雨雲を見つめた。

美術室へ行かない日を作ることも大切かもしれない。

――あそこに行けば、嫌でもキャンバスと向き合わねばならないから。

傘の先から雨が垂れ、弾けた。

甲高いブレーキ音が唸る。ざわめきがした。

しかし、それは雨音に重なって優花のところには微かな音としてしか届かなかった。

雨は断続的に降り続いた。大規模な低気圧が停滞しているらしい。優花は顧問から鍵をもらい、第二美術室の扉を開けた。

「白糸君」

彼はぼんやりと教室の真ん中に佇んでいる。優花が声をかけると、緩く首を捻ってこちらを向いた。

環の制服は少し濡れていた。

窓が開いており、重たい暗幕が微かに揺れる。あれ、と優花は首を傾げた。彼女は必ず窓を閉めて下校する。一昨日も確実に戸締まりをチェックしたはずだ。

……もしかしたら、優花の作品の進捗状況を見るため、顧問が立ち寄った際に開けっ放しにしていたのかもしれない。

「窓から入ったの？」

「ああ」

優花は雨が吹き込んでくる窓を閉めた。そして、まじまじと環を見つめる。彼が美術室へ足を踏み入れたのはこれが初めてだった。

「俺……谷窪に、どうしても伝えたいことがあって」

環の表情は切迫感に満ち満ちている。

「な、何？」

押され気味に聞けば、彼は唇を引き結んだ。

「あんたが言ってた……特別賞の作品、俺……見たことがある。一時期体育館に展示されてただろ。……『雨に流す』だっけ」

脳裏にこびりついて消えてくれない題名をいきなり口に出され、ぴくりと反応してしまう。優花は身構えた。彼は一体、何を言わんとしているのか。他の者達同様、あれは微妙だとも言いたいのか。歪な感情が心に渦巻く。

「俺は絵心なんてご大層なもん持ち合わせていないが、あの作品だけは心打たれた」

「何、言ってるの？」

慰めなんか要らない。あの作品は、他人の目には失敗作に映るのだろうから。

優花は盛大に顔をしかめて環を睨んだ。しかし、彼はさして気にした風もなく言葉を続けた。

「ああ、この作者は俺と同じ種類の孤独を感じてるんだろうなと思

った」

瞠目した。

誰も、気づいてくれなかった、絵に込めた才モイ。孤独。

息が詰まりそうになる。

環は左腕を右手で掴み、視線を落とした。

「絵には惑いや諦め、そして恐怖が滲んで見えた。その絵の講評には『雨に濡れても満面の笑顔を浮かべる人物が力強く描かれており、生命の貴さを感じさせる』なんて書いてあったけど、むしろ俺には

」

一旦言葉を切り、環は優花を真正面から見据えた。

「大声で泣いてるように見えた」

目を瞑って耳を塞ぐ少女とも少年とも判別出来る人間。その人物は大口を開けていた。

彼女……もしくは彼には、暗い雨が断続的に降り注いでいる。

目の奥が熱くなった。それはすぐに目頭から溢れる涙となる。

優花はその場にしゃがみ込んだ。嗚咽が止まらない。

「谷窪……」

気遣うように環が声をかけてくる。優花は鼻を嚙った。

「そう……白糸君の言うとおり。あれは泣き顔……。笑顔と泣き顔はよく似てるから……間違えられちゃった……」

ありがとう、と震える声で優花は言った。

「……共感してくれたの……うれし……」

あれは優花の心そのもので。全てを込めて描いた自分自身の姿だった。共鳴してくれる者がいるとわかっただけで、こんなにも救われた気持ちになる。

遠くで雷が落ちた。

あの絵を模写したような雨の中、優花は中々泣き止めなかった。今の彼女を支配しているのは、悲しいとか、辛い、苦しいなど簡

単に表現出来る感情ではなく。もつと複雑で、思春期のある一定時期しか持ち得ない、酷く不安定な感情。

それが環の言葉に揺さぶられた。

環は何も言わず、黙りこくっている。下手な慰めを言わない彼は好ましいと思う。

ようやく優花が泣き止んだ時には、雨も小降りになっていた。雲間から放射状の光が零れ出す。

「ちゃんと、わかってる」

ほん、と優花の頭を叩き、環は外へ続くドアを開けた。

涙でぼやけた視界で優花はそれを見送った。雨粒と光の中に環の姿が溶けたように見えた。

「……あの……」

消え入りそうになる声を奮い立たせ、優花は坊主頭の少年を呼び止めた。少年はクリクリした目を瞬かせる。

「あのっ、白糸君……最近サッカー部に出てないのっ？」

環が『雨に流す』を見たことがあると優花に告げてから早数週間が経つ。あれから、彼が美術室に訪ねて来ることはなくなった。

気になった優花は、ちょこちょこサッカー部の練習をのぞき見していた。環は、サッカー部にも顔を出していなかった。

「お前……誰？」

坊主頭の少年は不審げに尋ねてきた。優花は慌てて頭を下げる。

「あ……急にごめん。二組の谷窪って言うんだけど……」

いきなり呼び止めてきて、同じサッカー部員の仲間のことを聞いてくるなど——自分が坊主頭の立場だったら、きわめて怪しい人物だと思っだろう。

しかし、少年はコロッと態度を変えた。

「あー、ユウちゃんね！」

「さ、ユウちゃん……？」

初対面同然の坊主頭からそう呼ばれた優花は、面食らった。

「いやあ、環の奴が君のことよく話してたから、初会話な気がしないねえ。俺、青木っての。よろしく」

「はあ……」

「あいつ無口な奴なんだけど、君の絵のこと話す時だけは饒舌でさー。そんな気になるなら、さっさと話しかけて来いって言って、俺が美術室にサッカーボール投げ込んでやったんだぜ」

青木は得意げに鼻を擦る。

ああ、あの時いきなりサッカーボールが転がってきたのはそういう事情があったのか、と優花は納得した。

「あいつ、良い奴だろ」

「うん」

即答すると、青木はニカツと笑う。

「……最近、美術室に白糸君来ないから、風邪こじらせたのかもって、ちょっと心配で」

「あー……」

青木の顔があからさまに曇る。

「何かあったの？」

鋭く聞いた。青木は優花の問いに、目玉をキョロキョロさせていたが、やがて諦めたのか重々しく口火を切った。

「実は——今、環の奴……植物状態なんだ」

「えっ？」

肺から空気が抜けたような、間抜けな声が出た。

「この前、大雨の日に……赤信号で飛び出して……車に跳ねられやがった」

青木の声が萎む。

血の気が引いた。

そのあと、青木の話をつぶさに聞いた優花は、不可解な事実に関

がついてしまった。

環が事故に遭った翌日、優花は美術室で彼と話している。あれは夢だったのだろうか。

そして、もう一つ……気になることがあった。

環が事故に遭った時刻、現場近くに優花はいた。……事故現場は、優花が毎日のように通る横断歩道だった。

微かに急ブレーキ音やざわめきが聞こえたというのに、さっさと帰宅した自分を呪いたい。

青木は言っていた。環の家は事故現場とは反対方面だ、と。

事故前日、優花は環に本音を吐き出している。優花を励ますため、環が優花を追いかけた可能性が濃厚だった。自分は『雨に流す』が好きだと伝えようと、優花を見失うまいと赤信号を飛び出したのかもしれない。

——まさかと思う。

どうやって坊主頭と別れたかは覚えていない。優花の足は自然と第二美術室へ向かっていた。

がらんどうの室内は、絵の具やカンバスのにおいに満ちている。剥き出しの水道管から水の音がした。

優花はカンバスの前に立つ。そして、放り投げていたエプロンをつけた。

その目は固い決意を内包していた。

蝸こくわいの鳴き声がする病室のカーテンが、不規則にたなびいた。

ベッドには呼吸器と点滴に繋がれた痛々しい姿の少年が横たわっている。その枕元に置かれた小さな椅子に、少女は腰かけていた。夏の暮れの夕刻。

少女は大事に抱えてきた長方形のものを持ったまま立ち上がる。彼女はしばらくそれを見つめていたが、やがて深く頷いてそれを椅子の上に置いた。

「美術室で待つてゐるね」

その一言だけ残し、少女は病室を退室した。ぴくりと少年の指先が動く。

薄目を開けると、赤い陽射しがあつた。白い天井はシミ一つなく、薬品のおいが鼻につく。

環は目玉を動かし、静まり返った辺りを見渡した。

誰一人いやしない。カーテンで仕切られているから、個室でないことはわかる。

彼は、全て覚えていた。車に跳ねられて生死の境をさ迷い、その最中に優花に会ったこと。そして。

「三途の川、見てしまった……」

一人ごちる。背筋が薄ら寒くなった。

窓から生温い風が入ってきた。つんとする薬品のおいに混じつて、少しだけ懐かしい絵の具のおいがする。

片肘について上体を起こす。環の瞳孔が縮まった。

彼はすぐさまナースコールを押す。早く来い、と舌打ちしながら何度も押した。

——早く彼女のところへ。

その想いが環の胸の大半を占めていた。

椅子の上に残されたカンバスの中には降りしきる雨があつた。

『雨に流す』と同じパースにモチーフである。

しかし、全てが同じではなかった。

遠くには放射状の光が描かれており、少年……もしくは少女と思

しき人物の目は爛々と輝いていた。

……雨は止む。梅雨の一過性の雨がどれだけ降ろうと、必ず止むように。

「ねえ、谷窪さん今回コンクール出品しなかったらしいよ」

「しかも、これからはコンクールに出したりしないで、自分が描きたいものだけを描きますって宣言したって聞いた」

「あああゝ。シヨック……。あの天才的な絵が額縁に飾られてるのを見ることが楽しみだったのに」

「自分で飾ればいいじゃん」

「そんな問題じゃなく！ こう……コンクールみたいな栄誉ある場所で燦然と輝く絵っていうの？ それが見たいのっ」

「ねえねえ、それじゃ……谷窪さんが描けなくなっただって噂ホントだったわけ？」

「ううん。かなり完璧に近い作品完成させてたらしい」

「じゃあ何でー？」

納得出来ない、と美術部員は眉間に皺を寄せた。

「それがね……『これは大切な人のために描いた作品だから、コンクールになんて出さない』って突っぱねたんだった！」

女子部員のテンションが一気に上がる。

「相手って誰っ？」

「知りたい？」

「知りたいっ！」

どこから情報を仕入れてきたのか、ロングヘアの女子生徒が声をひそめる。皆、彼女に耳を寄せた。

「それが……サッカー部の——」

一瞬の間を置き、エーツと素っ頓狂な雄叫びを上げた。その中には泣くも者もいたらしい。

優花は秋色に染まる外の景色をガリガリと模写していた。

開け放した窓とドアから涼しい風が入ってきて、頬を撫でる。優花は鉛筆を置き、瞑目した。

運動部員が気合い十分に声出ししている。木々のさざめき、下校中の生徒達の笑い声。

世界は色んな音に満ちている。

ポーン、ポン、ポン。

優花は、ゆつくりと目を見開いた。まるで出会った時と同じ光景が広がる。

黒髪の少年は、何を言おうか考えているのか視線をさ迷わせている。

彼の変わりに優花は転がったボールを拾い、彼に近づいた。

「おかえりなさい」

そう言っただけで弾けんばかりの笑顔を見せる優花に刺激されたのか、環も目を細めて優しく笑った。

「……ただいま」

✕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1128p/>

短篇作品集『海底の砂』

2011年1月28日10時56分発行